

さまざまに姿を変えるモノから
生活の知恵や日本とのつながりを発見



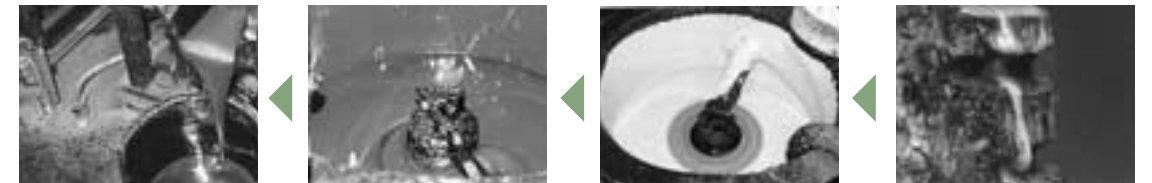
MoNo 変身図鑑

第30回 ウルシ

陶磁器が「チャイナ」と呼ばれるように、漆は「ジャパン」と呼ばれる日本が世界に誇る文化だ。しかし、今の日本の漆文化を支えているのは、中国やベトナムなどアジアの国々だという意外な事実も。身近でありながらあまり知らない漆を、改めて見つめてみよう。



幹に溝をつける「漆掻き」によって漆を採取する。樹齢10年のウルシ1本から採取できる漆は約250グラム

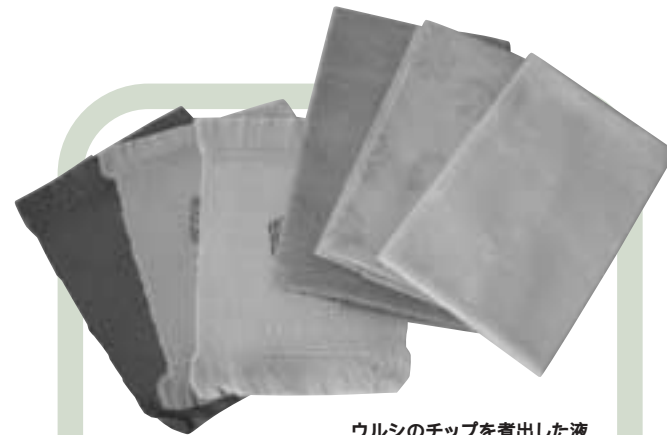


採取した樹液に熱を加えてかき混ぜると、乳白色の樹液は次第にあめ色へと変化していく

漆がてきんまて

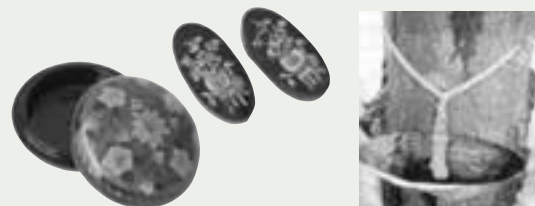
ろうそく

ウルシの種^{まご}の周りにある蠟はろうそくの原料となった。高価な蜜蠟のろうそくに手が届かない人々は、漆蠟のろうそくに明かりをともしていた。今も会津では漆蠟を使った絵ろうそくが作られている。下の絵は江戸時代に描かれた漆蠟の抽出作業



染料

ウルシのチップを煮出した液で、絹や麻、木綿を染めた漆染。色は木肌と同じ黄色をベースに、深緑色、濃茶などのバリエーションがある。製品にはスカーフ、コースター、ハンカチなどがある



デザインや色合いの違いで、出来上がりの風合いも異なる

V字に溝をつけるベトナムの漆掻き

塗料



木地に漆を塗り重ねた伝統的な漆器

ココナツヤシの葉に漆を塗り重ねて器に

竹炭の黒を漆が引き立てる

下地、下塗り、中塗り、上塗りと、細かな工程を経て作られる漆塗り。素材に使われるのは、日本では木材が最も多いが、ほかに草、紙、麻布、金属などさまざまな素材に用いることができる

革に漆を塗った器

ヨーロッパを魅了した日本の漆

ウルシは東南アジアに分布する落葉樹木。漆はウルシから採取される樹液で、東南アジアの国々では古くから塗料や接着剤として幅広い用途に活用されてきた。

日本では石器時代の遺跡から柄との接着部分に漆が使われたやじりが、縄文時代の遺跡からは漆塗りの土器や木器、くし、弓などが発見されている。さらに、戦国時代の武士のよるいや武具にも補強と加飾のために漆が使われている。漆は美しい塗料であると同時に、耐久性、抗菌性、耐薬品性に優れた素材であることを、これらの品が実証している。

日本の漆文化は、仏教とともに大陸から伝

った加飾技法によって芸術品へと発展し、日本独自の技法を生み出していった。花開いた日本の漆工技術は、正倉院の宝物や宇治の平等院などに今も見ることができ。そして大航海時代、日本の漆文化はポルトガル人によってヨーロッパに伝えられることとなる。日本の漆はヨーロッパ各国の王室や貴族を魅了し、「ジャパン」となったのだ。

アジアの国々が支える漆工技術

身近な漆で思い浮かべるものは、今でもこすりや箆、盆などの漆器くらいだが、かつては身の回りや木箱には補強のため、白髪染めには黒の染料

として漆が使われた。また、ウルシの種から採れる漆はろうそく作りに、漆粉は切り傷や潰瘍などの漢方薬に用いられていたこともある。しかしながら、現在、日本で使われる漆のうち日本産はわずか2%、残りの98%は輸入漆だ。そしてそのほとんどを中国産、次いでベトナム産、タイ産、ミャンマー（ビルマ）産が占めている。「シヤパン」と呼ばれる漆だが、日本の漆工を支えているのはアジアの国々なのだ。

伝統的な用途が減る一方で、最近では新築住宅の床や壁、風呂に漆が用いられるケースが増えている。化学物質を含まない漆はシックハウス対策だけでなく、焼却してもダイオキシンを発生しない環境に優しい塗料として見直されている。

漆は東洋の特産品 各地域で育まれた漆工技術

漆は産地によって成分が異なり性質も違う。一般的に南に行くほどゴム質が多くなるといわれ、日本や中国、韓国産の漆はウルシオール、ベトナム産はラッコール、タイやミャンマー産はチチオールを主成分としている。

最近、日本の雑貨店などでよく見られるのは、ゴム質を多く含んでいるベトナム産の漆器。日本や中国産に比べて硬度が低く、色に濁りがあるのが特徴だ。国によって異なる漆工技術を、いろいろと見比べてみるのも面白い。

取材協力=(社)日本漆工協会